

## 荒松雄君の「インド史におけるイスラム聖廟」に対する

## 授賞審査要旨

本書（昭和五十二年、東京大学出版会発行）は、「宗教権威と支配権力」という副題がついており、十三世紀から十九世紀前半にかけて造られたデリー地域に現存するスーフィー聖者のダルガー（聖廟）を中心として、イスラムを奉じる支配者の政治的権力とスーフィー聖者の宗教的権威との関係を考察したものである。研究史料としては、著者が度々インドに赴いて自ら行った遺蹟や宗教習俗の調査の成果を活用し、これをペルシア語・ウルドゥー語の文献や刻文と併せて利用している。

同書は四部に分かれている。第一部は「歴史的背景と課題・方法」と題して四章から成り立っており、第一章ではインドにおけるイスラムの浸透とスーフィー聖者の活動を概説し、ハーンカー（修道場）とダルガー（聖廟・墓廟）の語義を解説しており、第二章ではサルタナットおよびムガル帝国時代の首都としてのデリーの変遷と、この地におけるムスリム建造物の造営について説明し、第三章ではスーフィーに関する従来の研究と史料の性格を検討すると共に、イスラムにおける聖者崇拜その他、宗教権威と支配権力との関係を考えるための基本的諸問題を提示している。

第二部「デリーに現存する三大ダルガー」は、チシュティイ派に属する三聖人のそれを取扱ったもので、三章に分かれる。第一章「シェイフクトゥブディーンハフティヤールカーキーのダルガー」では、まずこの聖者の伝

記を略述し、デリーの南郊に隔たるメヘローリーの聚落にある彼のダルガーを取りあげ、その内域に現存する本願・墓石群その他の建造物、その周辺と近傍に存在する建造物を詳細に説明し、これらをまとめてサルタナット時代、ムガル前期、ムガル後期の三つの時代に分類し、それを手懸りとしてダルガーの変遷を考察している。第二章「シェイフ・ニザームッディーン・オリーヤのダルガー」は、第一章と同じ形式で、まず彼の伝記について述べ、ニューデリー東部の住宅地にあるそのダルガーに関して、内域に存在する墓と建造物、周辺と近傍にあるそれらを記述し、全体をサルタナットの初期、中期・末期、ムガル前期、後期に区分して変遷をたどっており、第三章「シェイフ・ニヤス・イルッディーン・マフムドのダルガー」でも同様に、ニューデリー東南郊外のチラグ・デリーにある彼のダルガーの内域、周辺・近傍の墓と建造物を叙述し、年代を区分してその変化を説明している。

第三部「デリーに残存する中小ダルガー」は四章に分かれ、第一章ではビービー・ファティマ・サームをはじめ「實在がほぼ確認される聖者のダルガー」、第二章では同様な人々の墓、第三章では「歴史的に不明確な聖者のダルガーと墓」、第四章では「地方的伝承に基づく不明の聖者の墓」を紹介しており、また付章として、ハーンカーと推定される建造物その他、デリーに現存するスーフィー関係と見なされる遺蹟について述べている。

第四部「ダルガーをめぐる歴史的諸問題」は五つの章があって、それに二つの付章がついており、第二部・第三部で紹介した諸史料を用いて歴史的考察を展開している。第一章「聖者崇拜と墓崇拜」では、スーフィー聖者の崇拜とその墓に巡拝する慣習の普及を説明し、第二章「ダルガーにおける墓と建造物の造営」では、聖者のダルガーの内域や周辺にムスリム支配層の墓、特にムガル朝の皇帝の墓、が設けられ、その他の宗教施設が造営された経過を論じ、

第三章「ダルガーの發展と聚落の成立」では、ダルガーが巡礼・祭事を中心となつて、その周辺に聚落が發達していった事實を説明し、第四章「スーフィー聖者の墓の形態・構造上の問題点」では、聖者の墓の上に、四本・六本・八本或いは十二本の石柱で屋根を支える建築物があることに注目し、この様式が簡素で、内部を見ることができ、墓石自体に近づき易い特徴のあることを指摘し、第五章「ダルガーに関する歴史的事実と信仰の実際」では、同じ一人の聖者について二箇所にダルガーが存在したり、墓の被葬者が時の経過する間に異つた人物とされたりする場合のあることを説明し、事實の眞偽とは別に伝承が影響力を持つてゐる事例を述べている。そして付章第一「スーフィー聖者の活動拠点の選定およびハーンカーの変遷」においては、第二部で取扱つたサルタナット時代の三人の聖者が、その生前に宗教活動の中心として選んだ地点が、宮廷のある区域とはやや離れていながら、政治的軍事的勢力を間接に利用し得る場所にあつたことに注意して、ハーンカーの社会的機能に言及し、その政治権力との關係をたどつて、トゥグルク朝のフィーローズシャーの時代に、スーフィーの宗教施設に対する積極的な支持が行われたことその他を論じており、付章第二「建造物造営をめぐるスーフィー聖者と支配権力」では、特にシェイフニザームディーンの場合を取りあげ、そのダルガーに隣接するジャマーアトハーンナマスジッド造営の考察を行い、一般にスーフィー側の文献では、支配権力との接触・交渉を拒む姿勢が強調されてきたものの、実際にはスーフィー指導者が支配層から必ずしも離れたところにいたものではないことを論じている。

以上述べた如くに荒君のこの著書は、スーフィー聖者のダルガーと、それに関連のある建造物ならびに宗教習俗を豊富に学界に紹介しており、これらの新史料を利用して、イスラム勢力支配時代の宗教権威と支配権力との關係につ

いて考察を行ったもので、今後解明すべき課題は少なからず残されているものの、インド史の研究に新しい分野を開いているといえることができる。